ねぐら入り観察会を通したツバメの保全意識向上に向けた研究

長　優里奈[*1]佐藤　綾香[*2]・小谷幸司[*1]・小島仁志[*1]
[*1]日本大学生物資源科学部くらしの生物学科　[*2]日本大学生物資源科学部森林資源科学科

【研究背景と目的】

ツバメとは？？

・スズメ目ツバメ科　学名*Hirundo rustica* Linnaeus,1758
・古今から農村部では害虫を食べる益鳥
・家屋などの人間の生活構造物に依存した営巣行動を行う
・春を告げる季節象徴種の一種

我が国における人と関わりの深い身近な野生鳥種といえる

しかし

・営巣環境となる家屋・建築物の変容
・巣材・食資源の確保の場となる農地の減少 → **1都2県で減少種（繁殖期）に指定**

●ツバメに対する国内での既往研究

・渡りのメカニズム解明に寄与する生態研究
・営巣や塒入り行動箇所・分布の全国調査
・巣材採集・採餌行動の保全に関わる保全生態学的研究など

生態学的研究は充実している。

保全意識の向上・契機となり得る社会学的側面からの研究は、ツバメを対象とした事例はほぼ見当たらない

そこで・・・

社会学的アプローチから考える保全策を検討する

- ツバメの印象・魅力は？
- 自発的に活動可能な保全活動は？
- 保全意識の普及啓発効果のあるコンテンツは？

これらを明らかにしていく

★ツバメの『ねぐら入り』に注目し・・・
→集団観察する人身が多く調査し易い
→本生態自体があまり知られていない
（保全意識向上に寄与できる可能性が高い）

ツバメの**ねぐら入り**とは・・・？

ツバメは繁殖のために日本に渡ってくる夏鳥であり、
初春3月下旬頃に繁殖期をむかえ、国内で営巣を行う。
4月～8月の期間に、通常1～2回の子育てを行う。繁殖中は主に巣や巣のそばでねぐらをとり、巣立ち後は10月上旬（繁殖期終了後）までの日の入り～明け方まで河川・湖沼周辺の湿原草地に集団ねぐらを形成する。多摩川では3万羽ほどの集団ねぐらを形成することもある。

<ツバメ集合>　<ツバメ旋回開始>　<塒入り>　<塒入り後>

【研究方法と対象地】

●研究対象地

・六郷土手（東京都大田区）
・粟ノ巣みどりの広場（東京都日野市）
※多摩川中～下流域に位置し、日本野鳥の会主催のツバメのねぐら入り観察会の実施地。

●研究方法

日本野鳥の会主催の「ツバメのねぐら入り観察会」の参加者に、アンケート調査を実施した。
観察時にアンケートを配布、回収方法は郵送での返信・回収とした。

・六郷土手（東京都大田区）
2017年7月30日、8月6日18時～19時
参加者23名、25名（アンケート配布数47部）
・粟ノ巣みどりの広場（東京都日野市）
2017年8月5日18時～19時
参加者223名（アンケート配布数100部）

アンケート配布の様子

配布したアンケート

<アンケート内容>
1.性別　2.年齢　3.ツバメの印象について
4.ツバメのねぐら入りを知っているか
5.国内のツバメの減少について知っていたか
6.ねぐら入りを観察してどんな印象を持ったか
7.日常でツバメを意識したことがあるか
8.ツバメに国内で生息してほしいか
9.今回の観察会を通してツバメへの愛着や保全意識が芽生えたか
10.ツバメの保護・保全活動があれば参加するか
11.どんな保護保全活動であれば参加するか
12.フンの処理問題や自宅の巣作りに反対の人に対してどんな解決方法があるか
13.ツバメのねぐら入りを広く一般の人に知ってもらうにはどんな方法があるか

【研究結果】

①回答者の属性

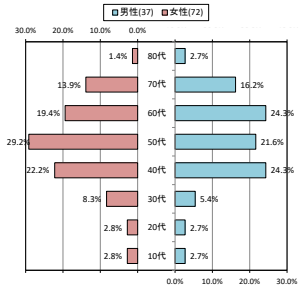
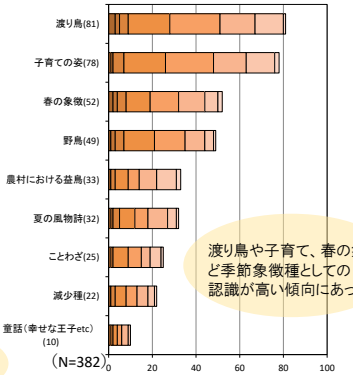


図1　回答者の属性（男女・年代）

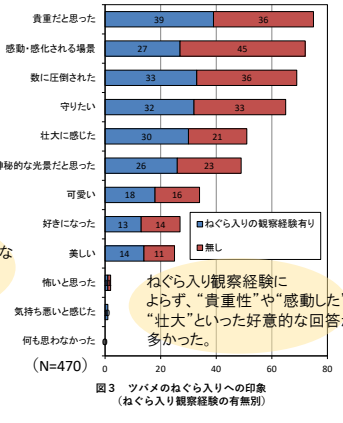
アンケート回収率は74%（N=109）であった。
男女別では女性が7割と多かったが、
年代別では40代～60代が多い傾向は同様だった

②ツバメ自体の印象について（複数回答可）



渡り鳥や子育て、春の象徴など季節象徴種としての認識が高い傾向にあった。

③ツバメのねぐら入りへの印象について（複数回答可）



ねぐら入り観察経験によらず、“貴重性”や“感動した”“壮大”といった好意的な回答が多かった。

図3　ツバメのねぐら入りへの印象（ねぐら入り観察経験の有無別）

④ねぐら入り観察による保全意識向上への効果

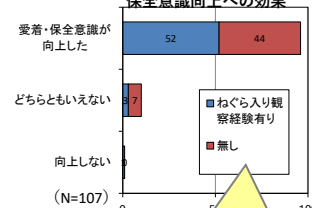


図4　ねぐら入り観察によって保全意識が高まったか。（ねぐら入りの存在認識の有無別）

理由

記述回答要約	回答数
・野鳥（ツバメのみならず）や自然（ヨシ原など）を保全したいという気持ちになった	30
・可愛い・愛おしい・好き	14
・感動した（圧倒された・心打たれた・力強さを感じるなど）	12
・身近にたくさんいるのを初めて知った	9
・理解が深まった（ツバメの知らなかった一面を見れた・生態など）	7
・来年も見せてほしい・見たい	7
・減っている事実を知ったから（塒やツバメが）	4
・身近に感じるようになった	2
・巣や塒を定期的に観察している・していきたい	2
・季節を感じさせてくれる生き物（春など）	2
・その他	10
計	99

ねぐら入り観察により9割以上が保全意識の向上に寄与していることがわかった（図4）。

⑤ツバメへの保全意識の程度

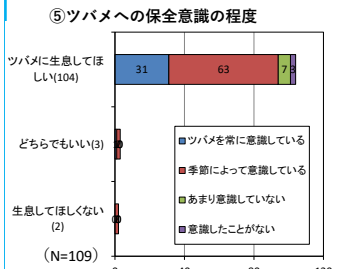


図5　ツバメへの意識程度による保全意識について

⑥ツバメへの保全活動意欲の程度

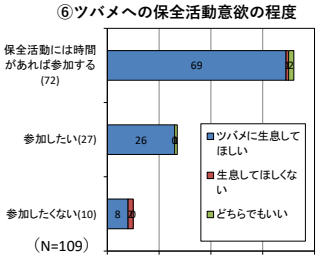


図6　ツバメへの保全意識による活動意欲について

ツバメの生息確保への訴求は高いが（図5）、保全活動への参加意欲は余暇を選択する回答が多かった（図6）。

⑦ツバメへの保全意欲と活動内容（選択・記述）

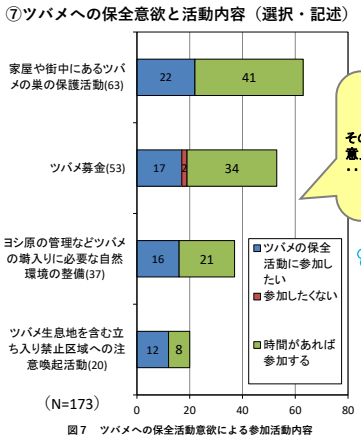


図7　ツバメへの保全活動意欲による参加活動内容

保全意欲のある回答者は、野外活動も含めた幅広い活動内容への参加意欲があったが、余暇を希望する回答者は、巣の保護や募金などの生活環境に身近な活動内容を選択していた（図7）。

その他の意見として・・・

記述回答要約	回答数
・ツバメについて知ってもらう（家族会議・ロコミ・SNS活用など）	12
・子供（小学生・幼児）と一緒に	3
・日本野鳥の会の保全活動に参加する	2
・巣やヨシ原（ねぐら入り環境）の保全ボランティア	3
・ビジネス的取り組み（ヨシの活用方法の研究と普及）	2
・ツバメ保護基金（政府関連への働きかけを含め）	2
・自然体、自然のままで（自然に任す）	1
計	25

さらに　巣のフン害への対策意見（記述）

記述内容要約	回答数
・フン害対策用アイテムの開発（設置しやすいフン受けの開発など）	54
・広報の充実（巣の保護、正しい知識の普及（鳥インフルエンザ）、減少傾向であること、野鳥含め・保全意識・啓蒙活動など）	20
・巣のできた世帯へのサポート（相談窓口の設置、フン処理の仕方指導、片付け支援、巣のある世帯への金銭的援助など）	15
・年少者への教育体制の充実	13
・安全に巣を移動する方法の確立	11
・巣作り専用の施設作り（営巣に協力してもらえる家屋を募集しワークショップを開催する、野外の公共スペースでの保護、巣作り協力者のネットワークづくりなど）	7
・地道な観察会を継続する	6
・巣を作られたくない方たち向けの対策などを提供する	2
計	128

巣のフン害に対しては、対策用品の充実や営巣家屋（世帯）へのサポートなど現実的な意見があった。

⑧ねぐら入り普及啓発の方法（選択・記述）

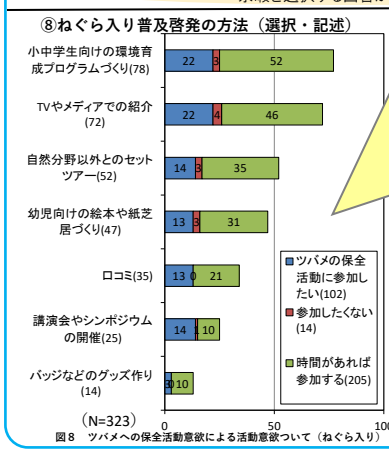


図8　ツバメへの保全活動意欲による活動意欲ついて（ねぐら入り）

その他の意見・記述として・・・

記述回答要約	回答数
・SNS・テレビなどのメディアでの紹介・働きかけ（若者にも情報発信）	16
・子ども向けのコンテンツづくり（地域の子供祭りなどで幼・小向けの小冊子配布やクイズでバッジ（グッズ）プレゼント、子供の頃からツバメと親しめるような機会をつくる、ランドセル販売時期にチラシを配布（4月～8月下旬まで観察するキッカケになりやすい））など	13
・広く知ってもらう必要は無い・自然体（知ってる人にだけ）・丁寧な対応を求める	12
・ねぐら入り観察会の充実（感激すること、家族での参加を促すなど）	4
・観察会とセットでのイベントツアー・フードフェス（ツバメの保護活動とのコラボ）など	2
・公共機関へのポスター貼り	2
・巣がある団地や家・近所の方だけに教える	2
・ツバメを保護するメリット・理由の説明	1
・注意喚起の張り紙があるところでのツバメの紹介（ツバメへの理解を広める）	1
・つばめ絵画コンクールや絵画展、写真コンクール	1
・ツバメのロゴの会社と連携活動（野球など）	1
・ツバメがいなくなったらと仮定した研究発表	1
・ツバメと社会・気候（自然）の関わりに注目して知らせる	1
計	57

環境教育プログラムの立案やメディア戦略、ねぐら入りとのセットイベントなどについて回答が多かった。

【考察とまとめ】

アンケート結果から・・・

◎ツバメやねぐら入りに対する印象は好意的
◎保全意識が高い
⇒ねぐら入りは保全意識向上に寄与できる

◎保全活動の参加意欲は高いが余暇の中でできる範囲が望ましい
⇒生活の中で身近に行える間接的な活動
（巣の保護活動・ツバメ募金など）

◎メディアの活用や環境育成プログラムづくり、自然分野以外とのセットツアーなどが普及啓発方法として意見が多い
⇒普及啓発体制の構築が必要

●ツバメ募金やヨシ原管理など、ツバメの保全策を検討する上で・・・
➡関連した事業の模索や他業種との連携が必要
➡自治体などに働きかけることで一般の人々が積極的に参加できる活動が考案できる
➡よりツバメの保全意識の向上につながる

本研究を進めるにあたり、ご協力をいただいた公益財団法人日本野鳥の会様、ならびに観察者の皆様に心より感謝するとともに、ここにお礼申し上げます。